

主役と脇役

全学共通教育推進機構長 高瀬 武典

おかしみのある芸能といっても、ひとりで演じる落語と、太郎冠者に主人がからむ狂言とはかなりの違いがある。大学の授業はそれほどおかしみのあるものでもなかろうが、最初から最後までひとりで続けられる授業と、教員とTAの共同作業によって進められる授業との間にも、落語と狂言ほどの大きな違いがあるように感じられる。

TAの導入については、これまで教員が抱え込んでいた仕事の一部を肩代わりさせるという、従来型の授業の延長としてのイメージが先行しがちである。しかし、前に一度FDフォーラムでTAをテーマにとりあげたとき（注）に話題になったように、それは新しいかたちの教育の展開から見ても大きな意味をもっている。狂言の主人役は、太郎冠者の演技の負担を軽減するために存在するのではない。主人と太郎冠者が揃うことによって、そこに

は一人芝居とは別の種類の演劇空間が立ち現れるのだ。

私の過去の経験から言うと、TAの効果的な活用は、授業内容や授業方法の段取りをうまく設計できるかどうかにかかっている。それまで自分の頭のなかで勢いにまかせて臨機応変にすすめていたやり方が通用しなくなるのだ。これにはプラスマイナスの両面があるが、段取りを考えて授業全体の見通しをよくする——いま流行している言葉を使うならば「見える」化する——ことにより、学習意欲を高めたり、カリキュラムを構成する個々の科目間の関連をわかりやすくするなどの副産物を生むものと期待できる。名脇役たるべきTAの登場によって、大学のここかしこで、わくわくするような授業が展開されていくことを願う。

（注：第9回FDフォーラム——関西大学「授業改善の広場」のウェブサイト映像をストリーミング配信中）

第14回FDフォーラム 開催趣旨・概要

「～TA、授業支援SA、授業支援アドバイザースタッフによる教育支援～」をテーマに第14回FDフォーラムを開催

11月21日、以文館カンファレンスルームおよび高槻キャンパスTB101教室（同時中継）において、「みんなのFDⅢ～TA、授業支援SA、授業支援アドバイザースタッフによる教育支援～」と題し、第14回FDフォーラムを開催した。出席者は教育職員・事務職員・学生あわせて約40名であった。

第1部では、菊地歌子外国語教育研究機構教授、板野智昭システム理工学部専任講師および豊田真穂文学部専任講師から、TAの効果について現状と将来展望の報告を行った。

第2部では、昨年9月に設立された教務センター授業支援グループで、授業改善等を支援するAdvisory Staff (AS) から一年間の活動と将来展望について報告された。また、授業環境の改善を支援するStudent Assistant (SA) および事務職員も議論に加わり、各々の立場から授業支援の将来展望について議論を深めた。

大学執行部をはじめ、ご協力いただいた多くの方々にご場をお借りしてお礼申し上げます。（全学共通教育推進機構）

第1部 講演要旨

TAの効果と将来展望—TAは授業の名脇役となれるか

文学部 豊田 真穂

このタイトルでTA活用の事例報告を依頼されたとき、なによりもまずサブタイトルの「名脇役」という言葉に引っかかった。というのも、講義の「主役」はいったい誰なのだろうと思案したからだ。ちなみにわたしは、自分の講義の「主役」は学生だと考えている。そうするとたしかにTAは、「脇役」に違いない。

わたしの講義は、一方的に知識を与えるのではなく、学生ひとりひとりが自ら問題意識をもって主体的に学び、考える手助けをすることを目指している。そのため、「批判的に考える力」や「自分の問題として考える力」を身につけられるよう指導したいと思う。そこで壁となるのが、どうすれば学生が「主体的に」考察できるようになるか、という問題である。

この問題を解決するために導入したのが、ディスカッションである。少人数のチームに分けてディスカッションをさせることによって、ひとりひとりが問題意識をもって主体的に議論することを半強制的に促す。最終的にはリーダーがチーム内の議論内容を講義中に報告するので、学生たちは比較的まじめに議論する。ただしチームごとの議論は、とすれば思わぬ方向へ



逸れることがある。そこでTAが活躍する。TAとは事前に綿密な打ち合わせをしておき、学生の意見や考えが時間内にまとまるように、大まかな方向性をあらかじめ確認する。実際の授業でTAは、教員と同じようにチームのディスカッションを補助する。

またTAは、講義のあり方や教員の欠点に対して忌憚のない意見をくれる最も信頼のおける批判者でもある。より

良い講義形式をともにつくってゆくという意味で、良質のFD効果を得られる。こうした教員に対するFD効果に着目すれば、TAはアシスタントというよりもむしろ講義を改善するためのパートナーであるといえよう。さらにTAにとっては、講義内容は無論のこと、問題を批判的にとらえる視点を醸成でき成長の機会となるし、TA自身が教員志望であれば自分の授業の際にも有益だろう。

「力学基礎演習」においてTAは名脇役になれたか？

システム理工学部 物理・応用物理学科 板野 智昭



本学工学部においては本年度大幅な改組が行われ、システム理工学部内に新設された物理・応用物理学科（定員60名）は基礎・計算物理コースと光学・応用物理コースの2コースをもち、その一期生として83名を迎えた。1学科としてのこの数字は理工系学部の中にあっては多くはない人数であるものの、入試の多様化からか、その学力

の分布の幅は大変広い。「力学基礎演習」は、物理学の要となる「力学」の概念や理論の「基礎」を、学力分布のある83名の全員に『理解』させることを目的に設置された。

さて、そもそも物事を『理解』するために人は何をしたらよいのか？インターネットなどの恩恵で知りたいことが簡単に手に入るようになった昨今、知識を生み出すための理解するという泥臭い作業が軽視されて久しい。もっと効率のよい方法を推す人もいるかと思うが、殊、物理の問題に限っては問題と向き合い想像力を働かせながら時間をかけてじっくり考え試行錯誤すること以外に、結局のとこ

ろ本当の理解に到達する術はないのだと思う。力学基礎の理解に留まらず、今後専門の研究に進んだ時にも必要となるであろう問題と向き合う習慣をつけるために、本演習では学生に基礎的な問題を数題与えて、時間をかけて取り組ませた。我々の学科では本演習科目を学力別に2クラスにわけ、1クラスあたり2名のTA（FDからのTAは1名に限られているので1名は学科からの援助を受けている）を巡回させている。TAには各人の理解のレベルに合わせて質疑に答えるように指示した。

本年度初めて設置された学科の初めての科目であるため、TAがなかった場合の授業がどうかなどの比較対象がなく、その効果を客観的に把握することはできないが、アンケートや学生との話をとおして私が知る範囲で、概ねTAの参加で授業は活性化されたと思う。まずTAが参加することで教員一人ではカバーしきれないクラス全体に目を配ることができた。またTAは学科の院生から選んだため、先輩のいない一期生にとって、大学院や大学での生活を少しでも知ることができた点、教員よりも若く学生にとって質問しやすいという点など、TAの参加によって明らかに授業に幅が出たように思う。その結果はアンケート結果にも如実に現れている。

TAは名脇役になれるか

外国語教育研究機構 菊地 歌子

「脇役」という定義は、教師が主人公であるという前提の元に設定されていると思われる。確かに講義形式の授業の場合は、生徒は客席におり、教師は舞台上で主役を演じる。この場合、脇役は舞台上に立ち、学生の方を向いて演技をすることになる。TAの存在は舞台を豊かにし、ストーリーの理解を助けるなど、脇役に匹敵すると思われる。

外国語の運用能力の養成を重視した授業の場合、授業時間中学生は、受け答えをする、練習問題の答え合わせをする、グループでロールプレイをするなど、特に発信者としての活動に終始する。このような形態の授業では、主役は教師ではなく、学生である。教師が演じる側に立つことがあるとしてもモデルのデモンストレーション程度に限られる。授業中、学生がグループ練習をしたり、黒板に書かれた例文などを写している間に教師は教室を巡回し、学生の質問に答えたり間違いを指摘するなどの指導をする。定員30名のクラスの場合、教師一人では十分な指導はできない。そこでTAの存在が不可欠となる。この場合のTAの役割は教師と同じであるが、学生にとっては教師より

TAの方が気軽に質問できるというメリットもある。教師の目が行き届かない時には、学生が支持された作業をするように促し、間違った方向に行かないように誘導するという点では、優れた牧羊犬に求められる役割を担っているのかもしれない。

以上のようにTA制度の現場での即時的メリットは、クラス運営、学生の学習効果として明らかである。さらにTA自身にとって重要なのは、学生とは異なる形で、複数の教師の授業に関与するという経験である。特に将来教師になることを目指している学生にとっては代え難い貴重な経験であり、教科教育法を履修したあとの実践として位置づけたい。TA制度が真価を発揮するためには、TA本人も教師も、将来の教師の養成という考え方で臨む必要がある。



第2部 概要、参加者の声

多くの大学が授業改善に向けて、授業評価や公開授業などさまざまな取り組みを実施している。中でも、Teaching Assistant (TA)、Student Assistant (SA) など学生を支援人材として雇用し教育支援をおこなう事例が増えてきており、今後の運用が期待されている。本学でも、2006年秋に教務センター内に授業支援を目的とした事務組織を設置し、Advisory Staff (AS) として大学院生4名、授業支援SA (SA) として138名の学生を活用し、全学的に教員の日常的な授業における支援をおこなっている。SAは資料や出席票の配付・回収・整理をしたり、メディアの操作支援などの教員支援を行う。ASはSAの教育や制度の向上、またSAでは対応できない教員からの高度な依頼を担当している。しかしながら、本学ではまだまだASの存在は知られていない。そこで本講演では、ASが関わった授業支援事例の紹介を中心に話を進めた。



ASは教育工学を専門とする大学院生4名から構成されている。主な業務は①教員対象に授業方法・ICT（情報通信技術）利用に関する支援②SA対象に教育、制度の向上に関する支援となっている。2007年度は重点支援項目として「学生とのやり取りを重視したICTの活用支援」をテーマに、効果的なパワーポイントの活用を目指した研修、教員への個別支援を実施した。

具体的には、商学部で実施した個別支援の事例では、大人数講義を担当する教員から「学習者同士のやり取りを増やしたい」という依頼をいただき、教員との協議を経て「電子掲示板（XOOPS）を活用した授業方法の提案」を行い、ASは電子掲示板の設置、電子掲示板を活用した授業方法の提案、授業でのTAの活用の提案とTAの教育を担当した。

その結果、授業は、これまでどおりの教員からの講義に加えて、授業終了後、学生は講義で学んだテーマに基づいた議題について電子掲示板に意見を投稿することができるようになり、また次の授業の冒頭では、大学院生が電子掲示板から学生の意見を幾つか取り上げ紹介する場を設けて授業に進むという形をとるようになった。こうして学生が講義をふりかえる場を提供し、発言し、意見交換をしあう機会を設け、当初の目的達成に寄与した。

このようにASは、授業をよくするための方法について先生と協働的に検討し、先生方の教育目的、教育観を汲んだ提案を心がけている。この記事を読んで興味を持っていただいた先生は、授業支援ステーションの担当者に連絡いただくか、support4@www.kansai-u.ac.jpまで連絡いただきたい。

またこの第2部では、参加者の皆さんで意見を交わしてもらう参加型のスタイルをとった。「AS、TA、SAを活用してどんな授業ができそうか」「こんな支援が必要ではないか」ということをテーマに教員、事務職員、学生が1つのグループになって、FDについて話し合い、その結果を発表してもらった。参加者からは、学生のモチベーションを引き上げるためにSAやTAがもっと活用できないかという提案が出されたり、教室環境を整備する支援が必要だといった指摘があげられたりした。短い時間であったものの、教員や学生が普段から抱えている課題について事務職員と話し合ったりする場も提供できた。今後も教員、事務職員、学生が対話しあえる場所を設けることは『みんなのFD』を実施するためには必要になるだろう。

教員・学生・職員が一緒になって議論したい

スチューデント
アシスタント (SA)

増田 峻大

FDフォーラムに参加させて頂き、多くの先生方と議論を交わすことができたことは、一人のSAとして、また一人の学生として大変有益なことでした。しかし、同時に大きな不満も持ちました。私が考えますに、大学という場所は教えられる場ではなく、自ら学ぶ場です。講義はその学ぶためのガイダンスに過ぎません。学生が大学に望んでい

ることは、研究者として自分の知りたい事に熱心に取り組む教員との出会いであり、学びやすい環境の整備です。教員数を増やす、学生数を減らす、学部の垣根を低くする、学費を安くする。こうした根本的な課題について教員、職員、学生が一緒になって議論する場が設けられること、それが学生たちの切なる願いです。

関西大学のFDの新たな時代への芽吹きを実感

教員

社会学部 東村 高良

私にとって「授業支援アドバイザースタッフによる教育支援」という標題は、FDの新たな時代を予感させる新鮮な響きを持ったものでした。

FDの現状は、(1) 第1期の品質管理(QC)改善モデルを準用した授業改善モデルによるFD活動が一巡したところで、踊り場にあるように思われます。そこで、(2) 次期の第2段ロケットとして強力な推進力になり得るのが、これではないかと直感いたしました。そして、このようなFDの新たな活動が、関西大学の内部から自前で芽吹いて

いることに大変感心いたしました。これは、総合情報学部
の教育工学分野の先生方初め大学院生、学部学生などの多くの協力があって初めて実践できたことと思います。

このようなFDの新たな展開で、関西大学のFD活動がさらに発展して、よりの確な授業改善がなされ、教育効果の向上が達成されるよう大いに期待したいと思えます。

事務職員と学生も参加するFDへ

事務職員

授業支援グループ 杉本 仁嗣

今回のFDフォーラムに事務職員として参加した。

授業を改善し教育効果を高めるためには、教員によるFD活動を組織的に進めていくことが、必要であることは論をまたない。今後は大学の構成員である事務職員や学生もFD活動に参画していくことの有用性を実感することができた。

特に第2部では、短い時間ではあったがグループワークを行い、TA・SAを活用した授業改善について先生や学生

とともに意見交換を行った。普段は、時には無関心、時には対立関係となる教員と事務職員が同じ目的(議題)で、議論することができ、有意義な時間を持つことができた。今後は、このような教職協働による取り組みを行うことが必要となってくるであろう。学生からは、授業中の私語についての問題提起があり、SAやTAによる巡回指導の提案があった。

第14回「FDフォーラム」に参加した感想

アドバイザー
スタッフ(AS)

遠海 友紀

今回のフォーラムは授業支援の取り組みを広報する良い機会だと思い参加させていただきました。報告に加え、皆さんに「ディスカッションをしてください」というお願いや直接SAさんの意見を聞いてもらうなどのスタイルを取ったので皆さんの反応を気にしつつの報告でしたが、興味深く聞いていただけたようで非常に良かったと思っています。特にディスカッションでは活発な意見交換が見られ、私自身勉強になりました。また、報告を通して参加された方から意見をいただくなど、私自身もアドバイザースタッフの業務を見直すよい機会となりました。このフォーラムで印象的だったのは、参加者の多さと熱心さです。FDに関する取組みが注目を集めていることを改めて実感しました。気軽にFDについて話し合えるこういった機会が今後もっとみなさんの身近になってほしいと思います。

